

目次	会員通信	283
	「苔衣」と詠まれた「コケ」～長崎県岩屋山にて～	／田中慶太283
	雲南地衣類調査行2006（その3）	／原田 浩284

会員通信 From Members

「苔衣」と詠まれた「コケ」～長崎県岩屋山にて～

“Koke-goromo” (moss cover or lichens?) appeared in a traditional Japanese poem made at Iwaya-yama, Nagasaki / by TANAKA Keita

田中慶太（長崎市立戸町中学校）

岩屋山(標高 475m)は長崎市北西部に位置し、ハイキングコースとして市民に親しまれている。岩屋山へ上るルートにはいくつかあるが、小学校から上るルートの麓には岩屋神社(図1)がある。この岩屋神社には、かの弘法大師が訪れたという言い伝えが残っている。この神社に時代がわからないが、次のような短歌が残されて

いる(図2)。

「岩屋山 岩屋岩戸の苔衣
きてみて帰る 瀬戸の初音」



図1. 岩屋神社入口付近.



図2. 「苔衣」が詠まれている歌碑.



図3. 岩室の様子。目だつ地衣類は見当たらない。

瀬戸村（現在の長崎県西海市大瀬戸町）に住む初音という女性が、岩屋山に参詣のため訪れた時のこと、弘法大師来訪以来、女人禁制となっていたため登れなかったという。この歌は、そのとき詠んだとされている。中には「苔衣」という語句が出てくる。岩室（図3）になっているところの上部に地衣類は見あたらず、蘚苔類が垂れ下がっている。ここでいう「苔衣」とは現在の地衣のことではなく、「衣のようなコケ」という意味なのであろう。樹状地衣は神社の境内付近にコフキカラタチゴケが少々ついているのみである。

なお、この歌に感心した山僧は、初音に登山を許した

そうである。

【岩屋神社付近で見られる地衣】

- ・ウメノキゴケ
- ・マツゲゴケ
- ・ナミガタウメノキゴケ
- ・エツキセンスゴケ
- ・コフキカラタチゴケ
- ・コフキヂリナリア

雲南地衣類調査行 2006（その3）

A field trip for lichen study in Yunnan, China, 2006 (part 3) / by HARADA Hiroshi

原田 浩（千葉県立中央博物館）

本シリーズも3回目となった（その2 は本誌77号）。まもなく次の調査旅行が待ち構えているので、駆け足で話を切り上げることにしたい。

* * *

2006年8月25日老君山を後にし、世界遺産に登録されている麗江の町に一泊し、更に北上、大雪山を目指し

た。四駆車ではない今回は、ぬかるみのため目的地に着くことはできなかった。止む無く帰る途上、道路わきの松林に立ち寄った。

松林というと、ずいぶんと乾燥しているというイメージが付きまとうとおり、老君山とは比べ物にはならない。林床には松葉が広がり、蘚苔類のマットはまばらである。

しかし、ここは雲南、やはりハリガネキノリ属の国である。松の幹や枝には必ずしも多量とは言えないが、ハリガネキノリ属も何種かが見られるようだ。

そこで私が気に入ったのは、何種類かの地衣類が生えた松ぼっくりだった(図1)。茶色っぽい樹状地衣はハリガネキノリ属の*Bryoria divergenscens*であろう。子器をたくさんつけている。黄色っぽい樹状地衣はサルオガセ属*Usnea*の幼個体である。ちょっと平べったいのはカラタチゴケ*Ramalina conduplicans*であろうか?裂片が厚ぼったい葉状地衣は、フクロゴケ属*Hypogymnia*のようだ。下側の痂状地衣は子器をたくさんつけている。

雲南から西蔵への街道沿いで、最も標高が高いのは、白馬雪山の峠である。自動車に乗ったまま標高約4300mまで達することができるという場所である。その少し手前で調査を行った。森林限界に近く、高木の生長は悪



図1. 地衣に覆われた松ぼっくり。

い。向かいには、U字谷も見える。カラマツなどの針葉樹の枯れ枝にはオレンジ色の紅雪茶*Lethariella*が生え、シャクナゲの枝にもさまざまなハリガネキノリ属が生えているようだ。あたりにはヤクなどが放牧されている模様で、そのためか芝生のような背丈の低い草地と、その中にポッチのように丸くなった背の低いツツジが特異な景観を織り成している。そのツツジには、また別のハリガネキノリ属が生えていた(図2)。

昨年、新種記載した*Bryoria fastigiata*である。また、何年か前に記載した*Bryoria hengduanensis*もカラマツの枝に見つけることができた。

調査を終え元来た道に戻ると、壮大な風景を目にすることになる。下るほどに土地は乾燥し、やがて、金沙江(つまり長江の上流)を眼下に見下ろすことができる。対岸は四川省である。周りには背が低く、トゲのある植物が多い。往路では、1地点で谷底近くの岩場で調査したが、出現する地衣類も他とはだいぶ違っ

図2. つつじに*Bryoria fastigiata*が生える。



ていたようだ。山上とは対照的に、暑く乾燥していることを体感できた。

最後の主な調査地は、大理石で有名な、大理市の近くにそびえる蒼山である。 *Bryoria divergescens* のタイプ産地であることも、調査地選定の理由の一つであった。ここはかつて Handel-Mazzetti が訪れ多くの地衣類標本を採取した場所なのである。・・・しかしここで紹介したいのは、大理の街角の食堂前の光景である(図3)。中国では(と言っても雲南以外は知らないが)、食材を

見ながら料理方法を指定して料理を注文するのが一般的のようで、ここも例外ではなかった。湖の魚介をはじめ、畑の野菜だけでなく、栽培したものと、山で採ったと見られる数多くのキノコと多彩で、土地の豊かさを感じさせる。そこに、カプトゴケ(図3右のa)とカラタチゴケ(図3右のb)も混じていたのはうれしい。

* * *

2006年8月の雲南の旅もこれにておしまい。今年10月の再訪はまもなくとなった。えうご期待。(完)



図3. 大理の街角の食堂前。色とりどりの食材が並ぶ。カプトゴケ(右a)とカラタチゴケ(右b)も見える。

●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌62号222ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 62, p. 222 of this publication.

● *Newsletter from the Japanese Society for Lichenology*, no. 79, pp. 283-286: eds. Harada H. & Kinoshita K., published by *the Japanese Society for Lichenology*, 30 September 2007.

日本地衣学会ニュースレター 79号

発行日: 2007年 9月 30日

編集: 原田 浩・木下 薫

発行者・発行所: 日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内

©2007 日本地衣学会 (© 2007 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複製等は固くお断りいたします。